



式辞

本日ここに、第五十八回原爆追悼式を挙行するにあたり、ご来賓の皆様、会員の皆様には、大雨警報の出ているご多忙の中をこのように大勢の方々にご臨席いただき、誠にありがとうございます。

あの忌まわしい、悲しい原爆投下のあの日から、六十九年の歳月が経



慰霊塔

理事長 井上公夫

過いたしましたが、動員学徒・女子挺身隊として出動中被爆し、犠牲となられた七千有余名の英霊にたいしまして、ここに、深甚なる哀悼の誠を捧げるものであります。

あの日、動員学徒として犠牲となった兄との永遠の離別の日、私は、現在の庄原市、当時の比婆郡に学童疎開していました。約一か月後の九月十三日、広島に帰った私は、広島駅で、目の前の瓦礫と、灰色の“似島”と、中国新聞社、そして福屋百貨店が私の脳裏に焼き付き、トラウマとなって、今でも“似島”の空を見る度に、兄の丸刈りの童顔が浮かびます。

本日は、原爆投下の日、平和記念公園の平和大通り付近で、建物疎開作業中、二百三十四名もの、多くの生徒さんを犠牲にされた、当時の第二国民学校、現在の広島市立観音おん中学校の生徒さんに参列していただ

発行所
一般財団法人
広島県動員学徒等
犠牲者の会
事務局
広島市南区比治山本町12-2
広島県社会福祉会館内
〒732-0816 電話 (082) 252-0316
郵便振替口座 広島0-8858番
印刷所 大成印刷

被爆六十九周年 記念号

デジタルブック
“衝突の証言”
<http://www.douingakuto.com/>

きました。

皆さんの、将来の活動の場は、核のない、平和な世界でなければなりません。世界各地の紛争の報道を、目にしますが、我が子を失って、悲しまない民族は絶対に存在しません。世界平和が到来する日を信じて、学び、鍛錬され、大きく羽ばたかれんことを願ってやみません。

私どもの会では、被爆体験の継承を進める目的で、八十六名の方の体験記を、文集「慟哭の証言」として発刊するとともに、電子ブックとしてもご覧に供しております。一部については、世界に発信すべく、英文に翻訳しております。

観音中学校の皆さん、ご参列の皆様、本日は、平和の大切さや、命の尊さを、今一度確認し、ノーマア広島おんの心を、世界に向かって、発信し続けていこうではありませんか。

終わりにりましたが、本日は、国会議員の先生方をはじめ、県議会議員、市議会議員の先生方、観音中学校の皆様方、ご供養をいただき、誠にありがとうございます。

心からお礼を申し上げます。

第58回原爆追悼式及び 来賓参列者(平成26年8月6日)

- 一、開会の辞
- 二、国歌斉唱
- 三、黙とう
- 四、式辞 理事長 井上 公夫
- 五、来賓追悼の辞

- (代)広島県知事 湯崎 英彦
- (代)広島市長 松井 一實
- 一、学校代表追悼の辞
- 広島市立観音中学校
- 生徒代表 河野 力

- 一、献花及び来賓者のお名前披露
(衆議院議員)
- (代)岸田文雄(代)平口 洋代(代)河井克行
- (代)中川俊直(代)寺田 稔(代)亀井静香
- 小林文明 中丸 啓 坂元大輔

- 齊藤哲夫
- (参議院議員)
- (代)宮澤洋一 溝手顕正
- 森本真治 山本博司 谷合正明

- (民主党代表) 海江田万里
- (広島県議会議員)
- 林 正夫 岩下智伸 山下智之
- 辻 恒雄 砂原克規 田川寿一
- 緒方直之 上田泰弘 山本靖雄
- 河井案里 佐々木弘司

- (広島市議会議員)
- 熊本憲三 三宅正明 近松里子
- 馬庭恭子 原 裕治 母谷龍典
- 土井哲男 伊藤昭善 田尾健一
- (広島市遺族会副会長)
- (広島市立観音中学校)
- 金井正弘

- 学校長 中山昭彦
- 教諭 齊藤直也
- 生徒代表 河野 力
- 外生徒4名

追悼のことば

広島県知事

湯崎 英彦

本日ここに「第五十八回原爆死没者追悼式」が執り行われるに当たり県民を代表し、謹んで追悼のことばを申し上げます。

顧みますと、あの忘れることのできない日から、六十九年という歳月が過ぎ去りました。

人類史上初めて使用された原子爆弾は、この慰霊塔の上空で炸裂し一瞬にして広島を焦土と化し、無限の可能性を秘めた動員学徒や女子挺身隊の方々を始めとする多くの尊い生命が失われました。

祖国の発展と安泰を願い、建物疎開などに従事中に亡くなられた、余りにも若い犠牲者の方々の無念の思いを、推しはかる時、哀惜の念、胸に迫るのを禁じ得ません。

また、最愛の我が子や、肉親を失われた御遺族の皆様には、長い間言葉に尽くせない深い悲しみと、多くの困難を乗り越えてこられたところであり、その間の御心労と御努力の程は、察するに余りあります。

私たちは、先の大戦の体験から「あやまちを二度と繰り返しません」と固く決意しました。

しかしながら、戦後生まれの世代が大多数を占める中、戦争体験の風化が懸念され、一方では、今なお恒久平和と核兵器廃絶への道のりには、険しいものがあります。

こうした今こそ、原爆の惨禍を乗り越えた「ひろしま」には、国際社会の平和と安定の実現に向けて、努力して行く責任があると考えます。

そのためにも、戦争の悲惨さやそこに幾多の尊い犠牲があったことを、次の世代に語り継ぐとともに国の内外に平和の大切さを強く訴えつづけていかなければなりません。

そして、この二十一世紀を平和で豊かな社会とし、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと、心から思える広島県を実現していくこと

を、お誓い申し上げます。

終わりに、犠牲者の方々の御冥福と御遺族の皆様の御多幸を、心からお祈り申し上げ、追悼のことばといたします。

平成二十六年八月六日

広島市長

松井 一実

本日、一般財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の主催により、第五十八回原爆追悼式が執り行われるに当たり、犠牲者の御霊に対し、謹んで追悼の言葉を捧げます。

六十九年前、ひたすら我が国の安泰を願いながら、動員学徒として、また女子挺身隊員として、軍需工場での作業あるいは建物疎開作業などに従事されていた数多くの方々が、原子爆弾により、若くして尊い生命を奪い去られたことは、誠に哀惜の念に堪えません。また、最愛なる肉親を亡くされた御遺族におかれましては、今なお、その悲しみはいかばかりかと、拝察申し上げます。

戦後、今日の豊かさと繁栄があるのも、こうした尊い多くの犠牲に負うものであり、私たちは、これに無にすることなく、二度と悲惨な戦争を繰り返さないよう、次の世代に語り継いでいかなければなりません。

広島市民の悲願である核兵器廃絶への願いは、次世代、そして世界中の人々が被爆者の体験や平和への思いを胸に刻み、核兵器廃絶の思いに共感し、そして供に行動するという循環が生まれてこそ実現できると確信しています。

このため本市では、被爆体験伝承者の育成等、被爆の実相の継承に努めるほか、世界の六、一〇〇を超える都市が加盟する平和首長会議のネットワークなど、様々な機会を通じ、今後とも広く、国内、そして世界の人々と平和への思いを共有してまいります。

また、平成二十七年には、広島は被爆七十周年という節目の年を迎えます。被爆七十周年は、原爆死没者の



慰霊と被爆者の援護、被爆体験の継承という被爆都市ヒロシマの役割を再確認し、決意を新たに「平和への思いの共有」を体現する年とするとともに、これまでのまちづくりの成果を踏まえ、まちづくりの新たな一歩を踏み出す年と位置付け、広島の将来に向けた取り組みを行います。

今改めてあの日を振り返り、亡くなられた皆様の尊い犠牲を深く心に刻み、今後とも戦争の悲惨さと平和の尊さを末永く後世に語り継いでいくことをお誓いいたします。

終わりに、御霊のとしえに安らかなる御冥福をお祈り申し上げますとともに、御遺族の皆様の御健勝を祈念いたしまして、追悼の言葉とさせていただきます。

平成二十六年八月六日

広島市立観音中学校
生徒代表

河野 力

本日、第五十八回広島県動員学徒等犠牲者の会追悼式に参列させていただくにあたり、犠牲となった方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今から六十九年前、たった一つの原爆により、広島は恐怖とはかりしれない絶望を与えられました。最愛



の家族を亡くされたご遺族の悲しみはとても大きく、私たちの想像をはるかに超えるものだったことでしょう。自分のご遺族の立場であれば、怒りと悲しみで、ただ泣き叫ぶことしかできなかったと思います。かうじて、命が助かった方々も、今日もなお放射線による後遺症で苦しんでいらつしやいます。原爆は広島の人々に、広島につながる人々に、長く消えない悲しみをもたらしました。

あれから、六十九年、被爆した方々は、重い口を開き、広島の惨状と平和の大切さを訴えて来られてきました。私たち、観音中学校も、被爆した方々の思いを直接伺える機会があります。毎年八月五日に行われる二高慰霊祭です。観音中学校の前

身である第二国民学校(第二高等学校)の先輩方、およそ二百六十名は、動員学徒として建物疎開作業中に被爆されました。そこは、爆心地から五〇〇メートルの場所であったため、即死に近い状態だったと聞いています。亡くなった生徒の同窓生の方々により、昭和五十二年に中国新聞本社前に慰霊碑が建てられました。この二高慰霊祭は、平成元年から観音中学校の生徒会が引き継いで毎年おこなっています。ご遺族の方々、校区内の小学校三校、PTAの方々の参加を得て、平和への思いを新たにしています。

昨日も、慰霊碑の前に、献花ならびに折鶴を献納し、これからの未来を担っていく私たちにできることを考えました。今の世の中を生きてい



く私たちにはいったい何ができるのでしょうか。ヒロシマで起こった惨劇と被ばくされた方々の思いを風化させないためにも、まず、私たちが受け継ぎ、次の世代へ伝承すること、世界へ拡げていくこと。自由に生きることを許された人生を精一杯生きることだと思います。平和だから、家族と食卓を囲むことができます。平和だから、明日の訪れに希望を抱き、眠ることができる。このように、平和の上に成り立っている幸せは、本当にたくさんあるのです。未来に起こる出来事は私たち次第です。平和も戦争も、創るのは全て私たち人間です。私たちは、ヒロシマに生まれた人間として、身近にある幸せに感謝し、まずは自分自身を認め、そして、相手を認めていき平和の輪を広げていくことを誓います。

平成二十六年八月六日



供養会

一、開会の辞

一、読 経

一、焼 香

一、閉会の辞

本年も六十九年前のように、暑い暑い日でしたが、八月五日西向寺様で、例年通り仏式の供養をねんごろに行いました。

お父様・お母様が高齢となられご出席が少なくなりましたが、それに代って兄弟・姉妹の方々のご出席が多くなりました。

障害を負って生き残っている私達も命ある限り、供養会を続けたいと思っています。皆さまどうぞご協力をお願い致します。



訪問記

〈大手町浄寶寺住職諏訪了我さんの戦争体験を聞いて〉

辻 精司

私は「被爆体験証言者寺前妙子さん」の伝承研修生として3年目になります。このたび、研修の一環で大手町にある浄寶寺を訪問して、ご住職の被爆体験講話を拝聴しました。16代住職の諏訪了我さんは、昭和8年4月8日生まれで81歳です。当時の浄寶寺は現在の原爆慰霊碑の西、約10mのところにありました。ご住職も「当時はしゃれたスズラン灯があり、高千穂館や世界館の映画館があった。ハイカラな喫茶店や旅館も沢山あった」と懐かしそうでした。家族はご両親、4歳上のお姉さん、ご住職の4人です。被爆時、ご住職は中島国民学校6年生、集団疎開されておられたので助かりましたが、ご両親とお姉さんが死亡され、孤児になりました。ご両親は現在も行方不明のままです。大手町の浄寶寺は昭和28年に建立されたものです。昭和12年には日中戦争が始まりました。昭和15年にご住職は中島小学校に入學し、その翌年の昭和16年12月8日に太平洋戦争が勃発。少年時代は、国のため天皇陛下のために命を捧げることが日本国民の使命であるとい

う戦時教育の真っ只中であつたのです。『アメリカやイギリスのことを鬼畜米英と教わってきましたが、子供心に、本当にアメリカ人やイギリス人は鬼や畜生のようなものだと思っていました。教育による影響の強さを痛感します』と話されます。太平洋戦争も敗色が濃くなった昭和19年春、中島国民学校から約260名が双三郡三良坂町と吉舎町のお寺や宮など七カ所に分かれて集団疎開されました。

4月13日朝8時、多くの保護者に見送られて広島駅を出発。ご住職は、『今思い出して最も心に残っているのは、ひもじい、ひもじい』という空腹の思いでした。食べられる草はほとんど食べました。イナゴやトノサマガエルも食卓にのりました。麦刈りや田植えの時期、農家に手伝いに行くと、白いご飯の「銀めし」が腹いっぱい食べられるので、子供の事ですから限度をわきまえず、必ず後で上げたり下げたりして先生を困らせました』と当時を振り返られます。もう一つが、親の元に帰りたいというホームシックです。いつも今

ごろ両親はどうしているだろうか。お姉さんはどうしているだろうかと思っておられました。そして、親を困らせたこと、よく姉弟げんかをしたことが思い出されて、子供心に後悔されたそうです。学童疎開生活の間に、一度だけ親たちが訪ねて来てくれました。親に会えることが嬉しく、どうやって親を喜ばせようかとみんなで相談して、暑い時だったので、冷たい井戸水で手ぬぐいを冷やして、親たちを待ちました。親たちも都会の貧しい配給の食料のなかから、工夫して子供たちの喜ぶ食べ物を用意してきてくれました。ほんの半日の短い逢う瀬でしたが、多くの者にとってこれが最後となりました。

昭和20年8月6日午前8時15分、原子爆弾がさく裂しました。三良坂町の光善寺には、爆心地に近い中島本町、材木町の児童がいたので、家族が亡くなった者が多くいました。ご住職も独りぼっちになりましたが、『ご遺体を見たわけでもないのに、信ずる気にはなれませんでした。どこか周辺に逃げておって、今日は迎えに来るのではないかと、明日は迎えに来るのではないかと待っていました。しかし、それは詮のないことでした』と、幼くして家族を失われた切ない思いを話して下さいました。家族がみんな死んだ事を信ぜねばならぬと思った時、もう親を喜ば

せる事は出来ない、親の喜ぶ顔を見る事は出来ないと思い、じだんだを踏みたいほど悔しい思いをした事を思い出されるそうです。夕暮れになると、みんなお寺の石段に腰をおろし、広島の方の空を見つめながらシクシクと泣く日が続きました。そして、肉親が迎えに来るごとに、一人二人と児童の数は減りました。ご住職は、『被爆から1ヶ月余り過ぎた9月16日に従姉が迎えに来てくれました。芸備線に乗り広島駅に降り立って、変わり果てた街の姿に茫然としました。赤茶けた焼け野原の向こうに、広島湾に浮かぶ似ノ島だけが昔と変わらぬ姿でよく見えました。駅前から電車道に沿って歩き、歩道が浮き上がったT字形の相生橋を経て中島に入り、すべて焼きつくされた家の跡地に立って、これから先いつたようなのかとうつろな思いであたりを見回した時の感慨は、今も忘れる事は出来ません』と、話して下さいました。いったん戦争が始まると、年寄りも子供も男性も女性も、すべてのものがその渦の中に巻き込まれてしまうのです。そこに戦争の恐ろしさや悲惨さがあります。『自分さえよければよいという自己中心の考え、つまりエゴイズム、また自分は正しく、悪いのは他人であるという独善性が戦争を招くもとではないか。それぞれの心の中に、エゴイズムや独善的なものがありはしない



か。もしそうであれば、目をそらさず、まずその心を直視する目を持つ事が大切です。自分のあさましさに対して素直に「相済みぬことだ」と顧みて反省することが大切です。そこから、相手の痛みや悲しみを、自分の痛み悲しみとして同感する心が生まれます。それこそが平和の原点だと思います』と、自分を顧みて反省することが大切だと話されました。そしてお姉さまの玲子さまは安芸高等女学校四年生で動員学徒でした。住職のとても貴重な体験講話を拝聴しました。

教育委員会主催の 被爆体験を聞く会にて

「被爆体験を聞く会」が七月四日広島市立高取北中学校であり、被爆体験のお話をさせて頂きました。その時の寺家栄子先生の御礼文です。

特に、心に残った話は、寺前さんが「先生が自分を助けなかったら良かったのに」と思ったところです。

でも寺前さんは「このつらくて恐しい体験を、次の世代に語りつがな」といけない」と、強く生きることを決心されました。私は戦争の時代に生きていたわけではないけれど、平和学習などで、「戦争はともておそろしい」「二度としてはいけない」と云うことを知りました。

これからの私たちは、とにかく戦争や原爆のことを、さらに次の世代に語りつがなければなりません。それと寺前さんが「今の平和な時代を幸せに思い、強く、明るく生きてください」と、云ってくださったので、私も毎日を大切に生きたいと思えます。今日は、被爆体験の話をしてくださり、本当にありがとうございます。

一般財団法人広島県動員学徒等 犠牲者の会への寄付

一、金 五百円	大上 瑞香様
一、金 貳千円	小柴 昌子様
一、金 参千円	池田 重義様
一、金 五千円	志水 清様
一、金 五千円	高下 照子様
一、金 五千円	宇葉 宗人様
一、金 五千円	桑原キヨコ様
一、金 五千円	保田 禮二様
一、金 五千円	向井 宏子様
一、金 五千円	平野みさ子様

(平成26年10月3日現在)



平成26年度広島県大雨災害 義援金について

この度、平成26年度大雨災害義援金として、社会福祉法人広島県共同募金会に、一般社団法人広島県動員学徒等犠牲者の会として、300,000円の寄付をおこないました。今回の義援金は、被災地の復興支援に使われます。被災地の一日も早い復興を願っております。

会員の皆様におかれましては、ご理解・ご協力をいただき、厚く御礼申し上げますとともに、ここにご報告申し上げます。

「あゝ、金輪島」

東京在住 元高校教師

竹内 良男

10月26日、金輪島の原爆死没者慰霊碑にみなさんとお参りしました。

この島で運ばれて亡くなっていたたたくさんの人たちの苦しみと悲しみに、私たちはどうすれば寄り添えるだろうか？

来年は被爆70年の区切りの年、何とか工場と交渉して、戦時中の施設（跡？）などをあらためて巡ることが出来ないだろうか？

それからもう一つ、この島の死者たちの名前を、もう少し明らかに出来ないだろうか？こんなことを考えるのも、毎年8月6日＝原爆の日、平和記念公園南側の市女の慰霊碑、あるいは平和大通りに面した第一県女の慰霊碑に刻まれた子どもたちの名前を、本当に愛おしげに目にするからである。そこに刻まれた名前は、単なる文字ではない。あの日から行方不明のまま、遺骨もないたたくさんの子どもの名前は、親族の人たちにとっていわば「墓標」である。



参加者での写真撮影

金輪島で亡くなっていた人たちのことを、私たちが心に刻むことは、彼らにつながる私たちの、いわば一つの責任でもあるのではないか？どんな形であっても、金輪島を「忘れられた島」のままにしておいてはいけないのだと思う。

警報なき空

井野口 靖弘

動員学徒「慟哭の証言」より抜粋(2)

今までに、我が家で被爆した話は、両親、妻、子供等に対して一度もしたことが無い。被爆者は癌になる率が高いとかマスコミでも言われているし、家族にいらぬ心配はさせたくないの、自分から詳しく話をした事はない、今後するつもりも無いが、思い出したくない心境である。

八月六日の朝、目覚めて起きてみると母の姿は無く、広島へ勤労奉仕に出発した後であった。前の晩にあればど行くことを反対して言ったのにと少し腹が立ったが仕方がなかった。私の弁当は食卓の上に作っておいてあった。通学の汽車は呉線の坂駅を六時五十五分に乗り広島に三十二分程かけて行き、広島駅から学校まで徒歩で約二十五分要していた。母等はその前の汽車で出発していた事と察した。友達と一緒に広島駅から学校に向かって歩いていると鶴見橋の東詰めで電車通りの建物横に空き地があり、家の近所の人達がたたくさん座っておられた、その中に母の姿を発見した。ちようど目が合ったので、町内会のおばさん達にも軽く会釈してその前を通り過ぎた。母の後日談であるが「朝笑って

通って行ったのが、親と子のこの世での見納めであったのか」と思ったそうである。

市街地の建物疎開をするために近くの各町村から勤労奉仕に人が多く集められていた。学校に着くと教室の自分の机に弁当箱を入れ、上服は椅子に掛けて運動場に出た。机の中には最近購入した上等な品のソロバンが桐の箱入りで置いてあった。

集合のあいずの鐘が鳴ったので、各自作業道具のスコップ、ロープ、木槌、鋸等が朝礼台の横に置いてあり、私はスコップの数が多くて使い易いので一個持つて集合した。午前八時が作業開始なので各組は二列縦隊に整列して朝礼の始るのを待っていた。地下足袋を履いてゲートルを巻き半袖の白シャツに帽子をかぶり右手にスコップを持つて中央より少し東側の前から五番目あたりに並んで先生の出で来るのを待っていた。暑い太陽の照る中で職員会議が長引き先生がなかなか出て来ないので、友達と雑談をしていた。(後日になつて解った実情は、若い職員が四、五人毎日の作業があまりにもきついで、欠席していてその引率する班を

誰が指揮するのかわかることで、会議が長く延びていた（そうである）我々は暑い中をグラウンドに立って待たされていたのであるが、その職員会議がはやく済んで作業に出発していたら当日の現場は宝町方面であったので、市の中心地に近くなり被害もより増えていたとも考えられる。

原子爆弾のことを戦後に広島ではピカドンと言ったものである、ピカールと光ってドーンと爆弾が破裂したからそう呼ばれていたのであるが、私の体験した事実はそうではないのである。ピカールと閃光が走ったぐらいではない、グラウンドに整列していたハッと気付くと目の前いちめんが全部火の海となり、左前方に講堂が建っていた辺りは炎の色が濃く、前方南側の校舎の方も赤とオレンジ色の混合したような濃いさで辺り一面が火の海であり、手の指を見ると両手を十センチ程に近付けるとようやく手の平と指の形がわかり、この間、火の海の中で何十秒の間も息は普通に出来て特別に息苦しくも感じられない、その瞬間はガスコンロに火を点けたように辺り一帯がオレンジと赤を混ぜたような色の火の海であった。太く鈍い音が地の底からズドンと聞こえ耳に手をおそうような大きい音には感じられなかった。そこで火に目を遣られるといけないと思って両手で目を押さえて前に伏せた。火の海であった炎の

中での時間は、前を向き左の建物を見て首を右に廻して西側の建物を見て、又、正面を向き手を眺めて伏せるまでの何十秒間は辺り四方八方は全部が火の中であつたので、その熱で肉が焼けて火傷になるのはいた仕方ないが、その時は熱いとは思わなかった。そして地面に伏せると今度は、竜巻の中に居るように真つ暗になり周り一面何んにも見えない状態で渦の中を五、六歩程度地上を泳ぐように足をかわした記憶があり爆風の中を吹き飛ばされて行ったようである。その後何分か気を失っていて我に返って気が付くと、暗い中から辺りが夜明けの如く少しづつ明るくなりグラウンドの南側で校舎のそば辺り迄さつま芋が植えてあつたが、その上に自分は倒れて居たことに気が付いた、整列して立っていた所から爆心地は西北の方角であるから南に約十五メートル程飛ばされていたと思われる。木造校舎はすぐ横に倒れていて瓦礫が散乱しその下敷きにならなくてよかつたと思った。方々で泣き声が聞こえて来たが自分は、こんな事で泣く気にはなれないので、死んでたまるかと思ひ死んでいるか生きているか試してやろうと思ひ顔を上に向けてオーイと大きな声を出してみた、誰を呼ぶでなく、ただ、ライオンが原野で吠えるのと同じ気持ちであつた、すると自分の耳に自分の声が聞こえて来たので、よ

し、死んではないと気を強くして立ち上がってみた、ふと左手を見ると親指と人差し指の間の皮膚が焼けて垂れ下がっている、右手を見るとこれも同じように皮が剥けて下がっている、垂れている反対側の指で皮をちぎり取って地上に捨てる、手の甲を指で押すと丁度焼き芋かジャガイモの皮付きを煮てその上を押すとつるりと皮が剥けるのと同じようであつた。

倒れていた所から一メートル先は校舎がずらりと潰れており辺りを見回しても友達の姿は誰も見当たらないので、自分は長く気を失っていたのであるうと思つた、勿論、帽子も手に持っていたスコップはどこに飛んで行ったのかわからない。

下半身はズボンを履いていたので怪我をしていなかった。瓦礫を踏み越えて電車通りになると一般の人が皆んな怪我をして思い思いの方角に歩いていて、比治山橋の東詰のすぐ下流に川の下に降りる石段があつて多くの人が行っていたので、無意識の内に下られて下におりた。見ると川の水は干潮で岸の砂浜に負傷した女学生や婦人がたくさん避難して座つたり、佇んでおり、水の中には多くの人が腰のあたり迄浸かつて何やら言っており、男性は老人が多くて火傷して痛むので水に浸けて居るのであるうと思つたが、自分としてはそんな気にはなれないので直ぐに

道路の上にあがり、早く家に帰りたい、そうしようと頭に浮かび決心した。その時、橋の横の電車軌道のレール上五メートル程前を学校の方角から生物のハムさん（杉田先生）が髪を白く焦がして右手で頭を押さえながら歩いて横断されており、その五メートル程後から福岡学校長が額の方から少し血が出ているようであつたが歩いておられ、自分でもよく解らないのであるが、どうしても挨拶の声を掛ける気持ちになれないのが不思議であつた、通行人はまばらであつたが前日の訓話が頭に残っていた事と家に帰る方角が違うし、目線が違っていたからと思われた。

アメリカがドイツのV一号かV二号を盗んで、広島に落としたのであらうとその時は思つた。

右に向かつて行く人、左に行く人、各自声も出さないうでそれぞれ好きな方に向かつて歩いており、太陽の光線が強く火傷がびりびりと痛く感じだしたので、泣く気にはならないし、こんなことで負けてたまるかと精神を入れ、先ずは病院に行つて傷に薬を付けて貰おうと思ひ電車通りを宇品方面に向かつて歩いた。友達や知人に全然出会わないので、皆さんなどこに行つたのであらうかと思ひ辺りを見ながら一人で皆実町を過ぎて、以前この付近に病院があつた記憶がしたので、少し行くと左側によややく共済病院が見えた、（現在の県病院

の近く)ここだ、よかったと思い近くと病院の建物の外に机と薬を出して若い医者白衣を着た看護婦二人が忙しそうに負傷者に薬を付けていた。自分の傷も太陽に当たり腫れてひりひりと痛んできたので、ここに来てよかったと思いその列に並ぶとようやく五番目に順番が来て、応急手当の白い粉薬を火傷している顔と両手に付けてもらい、白い包帯で目の所だけ出して顔にぐるぐると巻いてもらった。上半身の前面と両腕、両肩、胸と喉をやられていたので、足に巻いていたゲートルで白いシャツの上から胸のあたりをグルグルと肩から交互に巻いてもらい巻き終わった頃、丁度その時に大粒の雨がポツリポツリと降りだした。その斜め十五メートル程前に長い防空壕があったので、急いで走って行き、はいると私の後ろから二人の中年女性四十歳前後で少し肥えていて姉妹らしきよく似た丸顔であったが、雨が降り出したので治療を受けずに入ってきたとわかった。尻のあたりはびしょびしょに火傷がひどくすぐ左隣に座られた。髪は茶色に焼け焦げてがっそうで顔の前に垂れ下がっていた。

外は雨がよく降っていたとみえてよく濡れていた。後にこれが黒い雨であったと知り、濡れなかったので運が悪い中で良かったとほっとした。しばらくすると雨の降るのが止

み、入口の方の人から外に出て行ったので、後に続いて外に出てそれぞれ左右に散っていった。自分も我が家に急いで帰ろうと決心した。そこで広島駅に近づこうと思い病院の位置から電車通りより近道を通ろうと裏道を選び翠町から東に向かって歩いた。ところが民家がだんだんと少なくなり畑の中に点々としか家がなく行方の正面に赤レンガの倉庫が見え、これは道に迷ったのではないかと思いながら進むと、畑の中に四つ角があつて十メートル程過ぎた左側に田舎風の家が道路から少しはいた所にあつて、中年の男性二人と婦人三人がおられたので、「広島駅に行くにはどちらに行けばよいのですか?」と尋ねると「どこまで帰るのか」と言われ「呉線の坂迄帰ります」と答えると「汽車賃が無かるう」と男の人から五十銭硬貨を戴き、道を教えてもらい有難く感謝した。当時の汽車賃は四十二銭であった。その家は右側に二階建の納屋が西向きに隣接していて農家と思われた。被害は少ないと見え壊れた箇所が目立たないようであった。庭には大きな松の木が三本直幹で電柱程の高さがあり、その手前には大きなモクセイの木が二本植えてあった。

(次回に続く)

留学生訪問

寺前妙子様

拜啓 秋風が心地よい時節となりましたがいかがお過ごしでしょうか。

先日は貴重なお話を聞かせていただき本当にありがとうございます。

学生たちの感想文には、寺前様から直接当時の様子や現在の思いを聞くことができ、大変心を動かされたとのコメントがたくせん記されてい

ました。秋冷の折、くれぐれもご自愛ください。

またお会いできる日を楽しみにしております。

明治学院大学

国際学部事務室 富塚 直美



あとがき

今年の夏は例年がない豪雨が広島市に襲いかかった。土石流や山崩れが立て続けに起き、3時間ばかりで8月の1ヵ月分に当たる量が降り、山すその住宅地の人々は、夜通し鳴りやまぬ雷と斜面が急流となった土石流に逃げおくれた人が多く、2歳や3歳の坊やも。そんな夜明前のこと急に避難の支度もままならず、災害列島に住む心構えが試されたと言えるのでは。被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。

(平野)

戦時中、産めよ、殖やせよ! 国のため。と云う私が子供の頃、標語があつた。父の兄弟三人、各家に八人の子供がいて、大変賑やかで楽しかった。しかし戦争で一人のいとこはトラックで戦死、そして私の妹が被爆死した。戦争さえなければ。日本の人口は減りつつある。昔のように子供の声を沢山聞きたい。

(寺前)

